

2012年9月9日・「琉球新報」では

鋭く重い痛切な警告

脱原発・自然エネルギー 218人詩集 鈴木比佐雄ほか編

野田首相は財界、産業界の要請を受け原発再稼働を認め、一方、それに反対する一般市民による首相官邸デモは会を重ねるにつれその人数を増している。この現況を前にして強い危機感に駆られて『脱原発・自然エネルギー 218人詩集』が刊行された。本書はその名の通り原発を脱し、自然エネルギーを模索する一大アンソロジーである。編集者たちの周到な準備、構想によって喚起力あふれ説得力ある一冊となっている。

巻頭、音楽家・坂本龍一氏の序文『『アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である』とアドルノは言いました。ぼくはこう言い替えたい。『フクシマのあとに声を発しないことは野蛮である』と』に象徴されるように、各詩人が心の底からの、それぞれの切実な言葉を発している。

その中で私が特に感銘を受けたのは第1章「予知されていた悲劇」である。よく詩人は歴史や時代の鋭敏なアンテナだと言われるが、30年も前に既に詩人たちはこの度の悲劇をまざまざと予知していたのだ。

ななお・さかき氏の「蛙合戦」は日本国のお偉方やうさんくさい科学者、ジャーナリスト、文化人、さらには夥しい中産階級が喜々として原子力産業をおし進めている様を痛烈に戯画化した。鈴木文子さんの「夏を送る夜に」はアラーム・メーターのピーピー鳴る音を無視して作業を続け、やがてこの世からサヨナラしていく原発ジプシーを哀しく描写。若松丈太郎氏はチェルノブイリ事故からの連想で福島原子力発電所を中心に据えた半径30キロゾーンを「かなしみの土地 神隠しされた街」としてそのものずばり描いているのである。しかしこれらの予知は何ら生かさず第2章「繰り返された過ち」へと続かざるを得なかったのである。第3章「メルトダウンを見つめて」以下第11章「福島に寄せる海外詩人の詩篇」に至るまで緊密に織り上げられた声々が深く胸を打つ。(全編英訳付き)。

フクシマの悲劇に直面したわれわれを脱原発へと決意させずにはおかない鋭く重い痛切な警告の書である。
(ハ重洋一郎・詩人)

と紹介されています。